

Chapter 5 Listening: Sources, Skills, and Strategies (pp.74-87) by Tony Lynch

(番号は適宜上つけたもの)

- 速度、アクセント、馴染みのない文化的内容など、様々な要因により、L2 リスニングは、学習者にとって困難なものとなる。テクノロジーの進歩によって、リスニング学習はし易くなったが、学習者の内的なリスニングプロセスは変化していない。また、リスニングの研究者は、再話、発話プロトコルなど様々な方法を用いてリスニング過程の検証を試みるが、学習者のリスニング理解度は把握しづらいものである。

1. Sources of Listening Experience

- テクノロジーの進歩により、学習者の必要に応じて、教師は様々なマテリアルを選択し、学習を補助できるようになった。
- PC などデジタルメディアを用いた学習は、機器を使用することが教育目的を先行しがちである。しかし、テクノロジーの進歩は、既存の学習法にとって代わるのではなく、学習法を補足し、より学習をし易くするものであるという概念が必要である。

1.1 Sources of Difficulty

- リスニング理解は、「認識(perception)・理解(parsing)・活用(utilization)」(Anderson,1985)の3段階モデルのような段階的過程とも認識されるが、音声、語彙、語用など様々なレベルの同時処理が行われると理解した方が納得のいくものである。
- 韻律に焦点をあてると、聞き手は、L1 の韻律を L2 リスニングにも適応する傾向がある。例えば英語の韻律は「強・弱形」であるため、英語話者は強音節で音を区切る傾向がある。
- L1 話者が、L2 話者の英語発話を聞く際、「強勢のある音節」と「その強勢音節内の子音と母音」に、リスニング理解は大きく影響される。特に、音節内の最初の子音と、強勢母音が誤った発音であると、L1 話者は L2 発話を最も理解しにくい。ex)before が['pi:po:]と発音される場、people と間違える。

1.2 Sources of Help

1.2.1 Background Knowledge

- Schema と呼ばれる背景知識は、リスニング理解を促進するが、背景知識に過剰に頼ることは理解の妨げともなる。
- 熟達度に関しては、初級者は背景知識、またはボトムアップ理解に過度に頼りリスニング理解が低くなる。また、背景知識以外で問われる内容の理解度については、上級者のほうが理解度が高いという研究結果がみられる。

1.2.2 Visual Context

- L2 リスニングの際、言語以外の表現（直示的、相互的、話者の様相など）も重要な役割を果たす。視覚情報が、リスニング理解を補助する割合は限られているが、テキストの言語的難易度が高いほど、視覚情報が役立つ。
- Computer-enhanced language learning (CELL)教材に関する点では、動画は図や字幕などと共に用いると L2 リスニングに効果的で、動機や習得にも良い影響を与える。

1.2.3 L2 Knowledge

- 語彙と文法の知識は、L2 リスニングに大きな影響を与えるが、語彙知識が L2 リスニングと最も関係深い。しかし、読解のほうが、リスニングよりもさらに語彙知識が重要となる。
- Vandergrift(2006)は、L2 知識、L2 リスニング力、L1 リスニング力の関係性を検証した。結果、L1、L2 リスニング力は L2 リスニング得点に影響を与えるが、L2 リスニング力の方がより影響が大きかった。しかし、推測(inferential)理解と比較して、文字通りの(literal)理解に関しては、L2 熟達度（L2 知識）が最も重要な要因であった。
- リスニングにおける語彙の重要性を考慮すると、紙面上での文字でなく、音のつながりなどを考慮した自然な形式での聴覚の語彙認識は必要である。(Mecartty, 2000; Vandergrift, 2006)

2. Skills

2.1 The Strategy/Skill Relationship

- リスニング力(listening skills)とリスニング方略(listening strategies)の関係性について、Ridgway(2000)は、意識的なものと無意識なもののはっきりした区別はないと述べる。リスニングの際に方略を使用する認知容量はないため、認知方略を教えることは無駄であるが、対話などの交渉方略を教えることは有益であると述べる。
- それに対し、Field(200)は、skill は L1 の聞き手が自動的に使用するが、L2 の聞き手が習得できていないもので、strategy は L2 の聞き手が知識不足を補足するものとして用いる技法だと定義する。

2.2 Skills in Action

- Rubin (1994)はリスニングの難易度に影響する要因として、テキスト、話者、タスク、聞き手、過程の5つを挙げている。
- 音韻を解読する能力はリスニング理解に重要で、Rost(1990)は認識（perception,語の区切り）、解釈（interpretation,推測）、実行（enacting, 説明を求める・返答など）の階級に分けた。熟達度によって学習者は異なる skill を応用するとされている。
- Wu(1998)は、リスニング理解が低い場合は、スキーマ知識が活性化され不適切な解釈につながるが、理解が高い場合は、言語外の情報の活性化を抑制するが、スキーマ知識が全くなくなるわけではないと述べる。

3. Strategies

- 学習者のリスニング方略は「メタ認知、認知、社会・情意的方略」の主に3つのグループに分類され、熟達度が上がるにつれてメタ認知方略の使用が増えるとされる。
- Vandergrift et al.(2006)は、Metacognitive Awareness Listening Questionnaire (MALQ)を用いて、学習者のメタ認知方略使用を検証し、5つの方略使用（問題解決、計画、訳、人物知識、集中力）と熟達度は相関関係があると報告した。また、各方略は、組み合わせて使うものだと述べた。
- 方略指導が、リスニング理解を向上させるかについては証拠が不足しており、賛否両論がある。
- 学習者の文化的背景も方略使用に関連し、性質の一つとして「曖昧さへの寛容度」がある。寛容度が低い学習者は規則に頼るが、寛容度が高い学習者は曖昧なインプットの意味を積極的に推測しようとする。
- L2学習者のリスニング方略が、指導の有無で、どのように発達していくかを、長期で検証する必要があるが、方略のみを指導から切り離せないこと、また方略指導の有無に関わらず長期で熟達度は向上することから、長期的研究が不足している。
- Graham et al.(2008)が方略使用を6か月にわたって検証したが、学習者の方略使用は大きな変化はなく、熟達度と強いつながりがあるという結論であった。

4. Future Directions

- 科学技術の進歩によって、学習者は学習語を聞く機会が増え、視覚・語彙的補助も増え、有益な学習機会が増えた。CELLにおける、字幕、視覚提示などの異なる補助方法の効果、また短期的な理解向上が長期学習に与える効果などの研究が望まれる。
- リスニング力(skill)を重視するか、方略(strategy)を重視するかの論議について本章では触れてきたが、skillとstrategyの指導はバランスが大切である。リスニングが得意か不得意かは、適切な方略使用ができる能力ではなく、言語処理を行うことができる能力によって決まる。
- skill重視の指導において、教師は学習者の誤りを重視すべきである。「繰り返し」マテリアルを聞くことで、学習者はスピーチの流れを区分し、L2の特徴に気づくことができるため、「繰り返し」を多く活用すべきである。語の区切りなど知覚の段階だけでなく、解釈の段階で学習者にみられる誤りを、指導で使用できる。
- リスニング方略指導がリスニング理解を促進させるかについては疑問点が多い。方略指導をする教師の育成、方略指導を短期ではなく長期で行う、常にリスニング過程に注目する、オーディオではなくビデオ教材を用いることなどで、方略指導は向上する可能性がある。指導方法を改善することで方略指導がリスニング理解力向上に効果があるかを検証することができる。